

東日本大震災を忘れないつどい ― 姫花ちゃんのハンカチ ―

このハンカチをめぐる物語を通して、震災の記憶や教訓を思い起こし、災害に対する危機意識や防災意識を高めてほしいと思い紹介します。

ハンカチにのせた少女の夢

黄色に染まる空に真っ白の灯台。明るく手を振る人たちが印象的なハンカチ。描いたのは、福島県いわき市の小学４年生、鈴木姫花さん。東日本大震災の津波で、祖母とともになくなりました。当時１０歳でした。

「デザイナーになりたい」少女の夢をのせたハンカチ

姫花さんは、絵を描くことが大好きで、元気で朗らかな女の子。小学４年生の時に書いた作文には、２０歳になったら「デザイナーになりたい」と夢をつづっていました。

「十年後の自分へ。私は元気ですか。デザイナーになっていますか。それとも、デザイナーになるために、勉強していますか・・・」

震災の２年前、いわきの観光名所・塩屋崎灯台をテーマにした全国の絵画コンクールで入賞。家族や友だちと上ったこの灯台が、姫花さんのお気に入りでした。

しかし、東日本大震災の時、遊びに行っていた父親の実家で、津波に巻き込まれ、灯台の近くで亡くなりました。

激しい揺れが来た時、姫花さんは学校帰りで海沿いの祖母（明美さん）の家にいました。弟（皇成君）を迎えに行こうとした父（貴さん）が車で立ち寄ると明美さんが「姫花は家にいるから大丈夫」と言いました。貴さんは保育園で皇成君をピックアップし、明美さんの家に戻ろうと近くに車を止めました。直後、黒々とした波が堤防を越えて迫りくるのが見えました。命からがら貴さんは高台に車を走らせました。姫花さんと明美さんを車に乗せることはできませんでした。

明美さんの遺体が家のそばで、姫花さんの遺体は１週間後に塩屋崎灯台を南に回り込んだ海辺で見つかりました。

父親の貴さんたち家族は、姫花さんの「生きていた証」を残してあげたいと考え、震災の翌年、さまざまな人の協力を得て、姫花さんの夢をのせたハンカチ作りを始めました。ハンカチは地元の土産店で売り収益はすべて、震災義援金として市に寄付しています。

姫花さんの父親 鈴木貴さん

「亡くなってしまいましたが、娘を育てているつもりで生きているように手をかけてあげたい」「彼女の夢がかなうような気がするし、亡くなくてもなお仕事をして人の役に立っている。娘が生きているのと変わらないんじゃないかって思っています」